

はじめに

本書は、アジア考古学四学会が主催した第5回合同講演会「アジアの王墓」を基本として編まれたもので、すでに出版されている『陶磁器流通の考古学』に続き「アジアの考古学」シリーズの第2冊目となる。

今回の合同講演会は、日本西アジア考古学会が幹事学会を務め、2012年1月22日に明治大学駿河台キャンパスにおいて開催された。当日は大塚初重先生に基調講演をお願いし、続けて中村慎一(日本中国考古学会)、今村啓爾(東南アジア考古学会)、松本健(日本西アジア考古学会)の各先生にそれぞれの担当地域についてご講演いただいた。例年にも増して多くの方々にご来場いただき、合同講演会の認知度も高まりつつあることを実感することができた。

本書を編集するにあたっては、ご講演をいただいた四先生のほかに、アジア各地とそれに隣接する地域における「王墓」出現の様相ならびにその背景となった社会の諸相を概観できるように、多くの方々に執筆に加わっていただいた。「王墓」の概念は各地域の状況や時代性によって異なり、また個々の研究者によっても捉え方が異なることは承知しているが、突出した厚葬墓の出現や首長墓の顕在化などを指標としてまとめていただいた。各地における「王墓」の様相を、日本列島からヨーロッパに至るまで、横断的に通覧していただけるよう心を砕いたつもりである。

諸般の事情により出版までには時間がかかり、当初の予定を大幅に過ぎてしまった。早くから原稿をお寄せいただいた執筆者の方々には、最終稿の手直しなどでお手間を取らせたことをお詫び申し上げます。また、出版をお引き受けいただいた高志書院の濱久年さんには、校了まで粘り強くお待ちいただいたことに深く感謝申し上げます。

本巻編集担当

日本西アジア考古学会 三宅 裕・田尾誠敏

目 次

はじめに

第1部 東アジアの王墓

日本における王墓の出現——— 大塚 初重 7

奈良盆地における古墳時代前期の王墓——— 橋本 裕行 23

中国の王墓——— 中村 慎一 43

朝鮮三国時代の王墓——— 高久 健二 61

中国最南地域とベトナムの王墓——— 今村 啓爾 83

第2部 アジア西部の王墓

「王墓」なき社会——— 上杉 彰紀 93

中央アジアの王墓——— 林 俊雄 119

メソポタミアの王墓——— 松本 健 141

アラビア湾岸古代文明の「王墓」——— 後藤 健 161

第3部 地中海世界とヨーロッパの王墓

エジプトの王墓——— 馬場 匡浩 193

ギリシアの王墓——— 周藤 芳幸 217

ヨーロッパ最古の王墓——— 田尾 誠敏 237

ケルト人の王墓——— 津本 英利 261

執筆者一覧 289

第1部
東アジアの王墓

日本における王墓の出現

—墳丘墓から前方後円墳へ—

大塚 初重

はじめに

今から30年前くらいまで、日本列島における前方後円墳の出現については、「突発的に、あるいは突如的に巨大な墳丘を持った大きな古墳が出現してくる」という表現が使われていた。弥生時代にはその時代の墓制があつて、弥生の墓制と大型前方後円墳との関係論がはっきりしなかったからである。その突如として大前方後円墳が日本列島に生まれた年代は、西暦300年前後、3世紀末ないし4世紀初頭というのが、30年前までの古墳時代研究の一般的な考え方であった。

ところが、AMS（加速器質量分析 accelerator mass-spectrometry）の方法を使った新しい年代測定法が開発され、国立歴史民俗博物館の春成秀爾氏らを中心にしたチームがその新しい方法により、最古の前方後円墳の年代は240年から260年という結論を導き出した。また、奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫氏（当時、現桜井市纏向学研究センター長）は、この時期の土器の新しい型式論・様式論を提示し、それに基づいた編年細分を行って、弥生時代終末から古墳出現期の土器編年を、関西では庄内式土器から布留式土器へという型式となることを明らかにした。その庄内式土器も布留式土器も、0, 1, 2, 3 とさらに細分している。寺沢氏によれば、「突如として巨大前方後円墳が出現した」段階は土器編年でいうと布留0式で、その年代を世紀240年から260年くらいに達するだろうと主張された。

つまり、日本列島における古墳時代の始まりが、従来考えていた以上に、半世紀、もしくは1世紀近く古くさかのぼる、ということである。西暦300年頃に古墳が出現したといわれていた日本列島における王墓、巨大前方後円墳の出現の年代が大幅にさかのぼり、古くみる人で紀元200年、あるいは250年とい